

研究種目： 若手研究（B）  
研究期間： 2006～2008  
課題番号： 18730397  
研究課題名（和文） 社会的判断における認知的な主観的経験の役割に関する研究  
研究課題名（英文） The role of cognitive subjective experiences in social judgments  
研究代表者  
森 津太子（MORI TSUTAKO）  
放送大学・教養学部・准教授  
研究者番号： 30340912

## 研究成果の概要：

検索容易性、知覚的流暢性、親近感、既知感、舌端現象など、情報の入出力時に経験されるメタ認知的経験を「認知的な主観的経験」として包括的にとらえ、それらが社会的判断に及ぼす影響について、質的レビュー、およびメタ分析による量的レビューを行った。認知的な主観的経験は様々タイプの社会的判断に影響を及ぼしており、その影響は概して大きいこと、ただし判断のタイプや判断対象によって、影響の大きさは変化することなどが明らかになった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野： 社会心理学

科研費の分科・細目： 心理学・社会心理学

キーワード： 検索容易性、主観的経験、社会的判断、社会的認知、情報処理モデル

## 1. 研究開始当初の背景

近年の社会心理学は、認知心理学で発展した情報処理アプローチを取り入れ、人間を一種のコンピュータとみなすことによって、さまざまな社会的判断のメカニズムを明らかにしてきた。しかし一方で、研究が進むにつれ、単純なコンピュータ・メタファでは、説明できない事象があることが示されるようになった。

そのひとつが、最近、とみに関心を集めて

いる「主観的経験」の役割である。人間をコンピュータとみなすメタファにおいては、われわれが何らかの社会的判断を行う際に重要なのは、処理される情報の“内容”であり、どのような情報が入力されたり、出力されたりするかによって、後の社会的判断が異なると考えられる。しかし、最近の研究では、入出力される情報が同じであっても、そこに伴う主観的経験によって、まったく異なる意味づけがなされる可能性が示されており (Schwarz, 1998, 2004)、主観的経験が果た

す役割の重要性が再認識されている。それを反映するように、2000年には、主観的経験のみをテーマとする「秘められたメッセージ：主観的経験が社会的認知と行動に果たす役割 (The Message Within: The Role of Subjective Experience in Social Cognition and Behavior)」(Bless & Forgas, 2000) という本が出版され、そのなかで Wegner & Gilbert は「主観的経験の理解こそが、現代の社会心理学の中心的課題」だと述べている。

主観的経験への関心が高まった背景には、実験社会心理学の分野における研究手法の飛躍的な前進も影響している。実際、主観的経験については、古くから一部の社会心理学者（あるいは心理学者全般）が関心を寄せていたが、それが“主観的”であるがために「内観法」といったかたちでしか取り扱えず、科学的検証に耐える研究を実施するのが難しく、発展しなかった。また、主観的経験は、必ずしも意識的に経験されるものとは限らないので、その意味でも、内観法には自ずと限界があった。しかし近年は、そうした問題を解決しうる洗練された研究手法が蓄積しつつあり、主観的経験の研究も急激に発展しつつある。とはいえ、認知的な主観的経験に関する研究はまだ散発的であり、本研究のように主観的経験を包括的に扱う研究はほとんどない。

## 2. 研究の目的

上述のように、「主観的経験」は近年、関心が高まっているトピックであるが、本研究では、その中でもまだ研究が立ち遅れている「認知的な主観的経験」に焦点をあてている。「認知的な主観的経験」(メタ認知的経験とも言う)とは、われわれがさまざまな情報を入力する際に経験するメタ認知的な経験のことで、理解のしやすさ、思い出しやすさなど、ある種の情報処理に伴って経験される処理の容易さ・困難さのことである。例えば、繰り返し提示されたり、韻を踏んでいたりして、理解が促進される文章は、その内容にかかわらず、好まれたり、信頼されやすいといった現象が指摘されており、認知的な主観的経験は社会的判断に大きな影響を及ぼすものであることがわかっている。

認知的な主観的経験と呼べるものは多岐にわたり、よく知られているものとしては、親近感 (feeling of familiarity)、既知感 (feeling of knowing)、知覚的流暢性 (perceptual fluency)、検索容易性 (ease of retrieval)、舌端現象 (tip of tongue) などが、挙げられる。しかしこれらの現象は、これまでいずれもそれぞれ独立した研究の中で扱われてきたため、相互の関連性はほと

んど検討されていない。そこで本研究では、これまで個別の領域で独立に検討されてきた「認知的な主観的経験」をめぐる現象を整理・統合し、包括的な枠組みの中にこれらを位置づけることを目的とした。

## 3. 研究の方法

「認知的な主観的経験」をめぐるさまざまな現象を包括的な枠組みの中に位置づけるため、2種類のレビューを行った。

### (1) 先行研究の質的レビュー

まず、認知的な主観的経験に関する先行研究を、領域にかかわらず網羅的に収集し、その整理を行った。具体的には、認知的な主観的経験として理解可能な現象を分類・整理する枠組みとして適切なものは何か、どのような社会的判断に影響するものなのか、社会的判断への影響には、どのようなメカニズムが想定できるのか、といった点を整理し、さまざまな主観的経験の相互関連性を明確していった。

### (2) 先行研究の量的レビュー

上記の質的なレビューに加え、メタ分析の手法を用いた量的なレビューを行った。メタ分析では、それぞれの認知的な主観的経験が社会的判断に及ぼす影響の強さを「効果量」という数値によって表すことができる。したがって、この分析により、どのようなタイプの認知的な主観的経験が、どのようなタイプの社会的判断に対して、大きな影響力を持つか、またどのような条件でその影響力は増す(減る)のかななどを示すことを目指した。

## 4. 研究成果

### (1) 質的レビューによる成果

質的レビューによって、概ね以下のことが明らかになった。

#### ①分類・整理の枠組み

認知的な主観的経験を分類・整理する枠組みは多数考えられるが、もっとも重要なのは、それが情報の入力時に経験されるものか、出力時に経験されるものかという点と考えられる。入力される情報は外界にある新規な情報であり、出力される情報はすでに記憶内に蓄積されている情報であるため、情報処理のプロセスが両者では異なると考えられるためである。これは、経験される認知的な主観的経験の特徴の違いにもつながる。先にあげたもののうち、親近感、既知感、知覚的流暢性は、何らかの刺激を知覚する際に経験する

ものであることから、情報入力時の認知的経験と分類することができる。一方、検索容易性、舌端現象は、何かを想起しようとする際に経験するものであることから、情報出力時の認知的経験と分類できる。

## ②判断の種類

認知的な主観的経験が影響を及ぼすとして検討されている判断には、単語の頻度推定、過去の行動の頻度推定、確信度、好意、ステレオタイプの判断、態度、説得、有名性、幼児期の記憶、リスク判断、製品の判断、親密性、自己欺瞞、後知恵バイアス、計画錯誤などがあり、適用範囲は広範かつ多岐にわたっている。

## ③メカニズム — 処理の流暢性の誤帰属

認知的な主観的経験が社会的判断に及ぼす影響を説明するメカニズムは、認知的な主観的経験の種類にかかわらず、「処理の流暢性の誤帰属」という説明が、もっとも妥当だと考えられる。すなわち、何らかの理由により情報処理の容易さ・困難さ（流暢性）が経験されると、ひとはその原因を求めることになるが、情報処理の流暢性をもたらした本来の原因が曖昧でわかりにくい場合、誤って別のものを原因と判断してしまうという説明である。

たとえば、実験参加者にある出来事を思い出してもらった場合に経験される処理の流暢さ（検索容易性）は、出来事の頻度推定に影響を与える。思い出しやすいのは、そのような出来事によく遭遇しているからだだと判断されるからである。しかしながら、思い出しやすいのは、実際には単に思い出す数が少なかったに過ぎない場合でも、同様の結果が観察される。

「処理の流暢性の誤帰属」が、妥当なメカニズムと考えられるのは、以下のような研究結果があらゆる認知的な主観的経験に共通してみられているためである。

### a. 効果の生起に、先行経験の想起を要しない

処理の流暢性を惹起する実験操作（先行経験）と後続の社会的判断とは、無関係なものとされていたり、処理の流暢性を惹起する実験操作は閾下刺激を用いても行われていたり、先行経験に係る再認・再生成績と社会的判断の内容は無相関もしくは低い相関しかみられない。

### b. 長期にわたって効果が持続する

24時間後や、3週間後など、先行経験とのかの社会的判断との間に長期の遅延があっても効果ある。また、遅延があったほうが、

効果が大きいことを見出している研究もある。

### c. 先行経験を想起できる可能性が高まると、効果が消失したり、対比効果が生じる

先行経験の内容に注目をさせる操作をしたり、先行経験の内容を再生できる者には、社会的判断への影響が見られなかったり、反対方向の影響（対比効果）が見られる場合がある。また、先行経験の操作を閾上の刺激を利用して行った場合は、閾下の刺激を利用して行った場合より、効果が小さい（もしくは消失）することを示す研究がある。さらに、先行経験の直後では社会的判断への影響はなく、時間が経ってからはじめて影響がみられることを示す研究がある。

以上の研究結果は、処理の流暢性を惹起した原因が正しく推論できる可能性が低まるほど社会的判断への影響は大きくなること、反対に、処理の流暢性を惹起した原因が正しく推論できる可能性が高まるほど、社会的判断への影響は小さくなることを示しており、「処理の流暢性の誤帰属」という仮説を支持するものと考えられる。

## ④メカニズム — ヒューリスティック処理か、システムティック処理か

認知的な主観的経験が社会的判断に及ぼす効果は、一般には、ヒューリスティック処理に基づくものと考えられているが、それでは説明がつかない研究知見がある。それらの知見は、むしろこの効果がシステムティック処理に基づくことを示唆している。ただし、この差は、操作チェックを行うタイミングなど、実験手続きに起因するアーティファクトという指摘もあるため、系統的な検証が必要と考えられる。

## ⑤情報としての主観的経験と診断性

認知的な主観的経験が判断に影響するのは、それが当該の判断に対して情報価をもつとみなされるためと考えられる。それは、実験場面においては、誤った推論（誤帰属）となるが、現実場面においては合理的理由あるいは適応的意味を反映する場合が多いためであろう。

つまり、認知的な主観的経験が、当該の判断に対して、情報価がないことが明らかな場合には、認知的な主観的経験は社会的判断に影響することはないと考えられる。認知的な主観的経験が社会的判断に対して持つ情報価は、一般に「診断性」と呼ばれ、いくつかの研究が診断性の効果を検討している。その結果は、概ね上記の仮説を支持することを示している。

## (2) 量的レビューによる成果

量的レビューにおいては、まず個別の認知的な主観的経験のメタ分析を行い、それを全体で統合するという方法をとった。この際、特に社会的判断への影響についての研究が多い「検索容易性」にまず焦点を当て、そこでの結果をもとに、他の主観的経験の効果を検討することとした。その分析については、まだ一部、進行中のものであるので、ここでは「検索容易性」について行ったメタ分析の結果を報告する。

本メタ分析は、「検索容易性」に関連するキーワード (ease of retrieval, availability heuristic, subjective experience) に基づいて、心理学および周辺領域の論文データベースから集めた 39 論文に掲載された 80 個の独立した研究に基づくものである (ただし、メタ分析に必要な統計量が記載されていないものは、分析の対象から外している)。効果サイズ (effect size) の指標には、統制群と実験群の間に観察された平均値の差を標準化することによって得られる Cohen の  $d$  を採用した。また、有意な結果が見られなかった研究は公刊されないという「お蔵入り問題 (file-drawer problem)」に対応するため、効果サイズに加え、フェイル・セーフ数 (fail-safe  $N$ ) も算出した (その他、98%信頼区間の算出や、同質性の検定も行ったが、ここでは省略する)。結果として、以下のことが明らかになった。

①検索容易性は、多様な社会的判断に影響をもたらしているが、検討されている判断のタイプには偏りもある

すでに、質的レビューの項でも触れたが、検索容易性のみ限定しても、認知的な主観的経験は、多様な社会的判断への影響が検討されている。ただし扱われている判断のタイプには数の偏りもあり、今回対象とした研究のうち、39 個は態度 (attitudes)、12 個は特性判断 (trait judgments)、7 個は頻度推定 (frequencies estimates)、6 個はリスク判断 (risk judgments)、5 個は記憶 (memories) を扱ったものであった。

②効果サイズは概して大きい

検索容易性がさまざまな社会的判断に対して及ぼす影響の効果サイズは全体で  $d = .76$  であった (Table 1)。また検索容易性にかかる操作以外の実験操作を付加している実験

を除き、純粹に検索容易性の効果のみを調べている研究に絞って効果サイズを算出すると、 $d = .81$  となった。Cohen (1977) は  $d = .2$  を小さい効果、 $d = .5$  を中程度の効果、 $d = .8$  を大きい効果と位置づけている。したがって、この基準に基づけば、検索容易性は社会的判断に大きな影響を及ぼしていると判断できる。

Table 1 Effects Size of Ease-of-Retrieval Manipulation

	Number of effect sizes	Weighted Mean $d$	Fail-safe $N$
All	60	.76	168
Only ease of retrieval manipulation	34	.81	103.7

③判断のタイプによって大きさは変わる

上記のように、全体としての影響力は大きいですが、判断のタイプごとに効果サイズを算出すると、その大きさはかなり異なる。態度判断 ( $d = .75$ ) や行動頻度の推定 ( $d = .52$ ) では大きいですが、特性判断 ( $d = .18$ ) やリスク判断 ( $d = .14$ ) ではあまり大きくない (Table 2)。

Table 2 Effects Size of Ease-of-Retrieval Effects and Influence of Judgment Type on Size of Ease-of-Retrieval Effects

	Number of effect sizes	Weighted Mean $d$	Fail-safe $N$
All	38	.57	70.30
Judgment Type			
Attitude	13	.75	35.75
For Arguments	7	.96	26.60
Pro	5	1.02	20.50
Contra	2	.59	3.90
Trait	6	.18	-
Self	4	.41	4.20
Other People	2	-.39	1.90
Memory	5	.47	6.75
Frequency	4	.52	6.40
Risk	4	.14	-
Self	1	.38	.90
Other People	3	.08	-

④判断対象の種類によっても変わる

効果サイズの大きさは、判断のタイプだけでなく、判断の対象によっても変わる。もっとも効果が大きいのは事物・事象に関する判断 ( $d = .89$ ) で、次いで自己 ( $d = .47$ ) の判断で効

果が大きい。一方で、他者判断( $d=.04$ )では効果が出にくい (Table 3)。

Table 3 Influence of Type of Target of Retrieval on Size of Ease of Retrieval Effects

Target of Retrieval	Number of effect sizes	Weighted Mean $d$	Fail-safe $N$
Self	19	.47	25.65
Other People	6	.04	-
Other Things	13	.89	44.85

⑤情報の診断性の有無が影響の方向性を左右する

質的レビューの項でも触れたが、認知的な主観的経験の社会的判断への情報価(診断性)がなくなると、その影響力は弱まるものと考えられている。この点について、実際に診断性の操作が含まれる研究で効果サイズを比較すると、診断性がある場合には判断に影響を与えるが( $d=.41$ )、診断性がない場合は影響は反対方向の影響を与えていることがわかる ( $d=-.27$ )。

Table 4 Influence of Diagnosticity on Size of Ease of Retrieval Effects

Diagnosticity	Number of effect sizes	Weighted Mean $d$	Fail-safe $N$
High	6	.41	6.3
Low	6	-.27	2.1

以上のように、あらゆる認知的な主観的経験をめぐる現象を、統一的な枠組みで整理・統合するという試みは、まだ混沌としており、明確な解決策は見出せていない。しかしながら、質的・量的レビューの実施により、いくつかの鍵となる論点が浮き上がってきた。今後は、その論点のひとつひとつについて、実験を計画し、実証的に検討を行っていく予定である。

なお、本研究のようなかたちで、認知的な主観的経験を包括的に検討するという試みは、本研究を開始した時点でも、また現在においても、国内外問わず存在していない。そのため、本研究の一部を国際学会などで紹介した際には、関連する研究者たちの関心をひいた。そこでのディスカッションにより、今後の検討を進める上でのヒントも得ている。今後の研究に結びつけていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

森 津太子、検索容易性の経験が社会・認知的判断に及ぼす効果、放送大学研究年報、査読無、26 巻、2008 年、47-54 ページ

[学会発表] (計 1 件)

Tsutako MORI, A systematic review and meta-analysis of the ease of retrieval effect in social judgments. Paper presented at the 10th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2009 年 2 月 7 日、Tampa, Florida, USA

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森 津太子 (MORI TSUTAKO)  
放送大学・教養学部・准教授  
研究者番号：30340912

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者